

エベネゼル緊急基金
出エジプト作戦



EBENEZER
OPERATION EXODUS

アリヤーの ための角笛

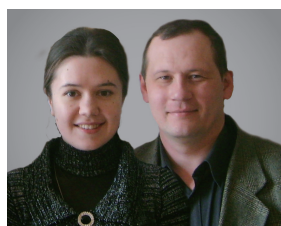


「また、短く吹き鳴らすと、東側に宿っている宿営が出発する。二度目に短く吹き鳴らすと、南側に宿っている宿営が出発する。彼らが出発するためには、短く吹き鳴らさなければならない。」民数記10章5、6節



悲しみの中にある喜び

モルドバ



パベル&リナ
モルドバリーダー

ヨーロッパの中でも最も貧しい国の一つであるモルドバは、260万人という少ない人口の国であるにもかかわらず、かなり多くのウクライナからの難民を受け入れています。また、イスラエルに帰還するユダヤ人たちは、ユダヤ機関とクリスチャンの団体からすべての必要な支援を受けています。

長い時間車に乗って、年配の夫婦や子供連れの母親たち、時にはペットを連れて、首都のチシナウに着きます。彼らは肉体的にも精神的にも疲れ果てています。

私たちが歓迎し支援した人々の中に、スベトラナ（58歳）と彼女の双子の息子たち、ユリとオレグ（38歳）、オレグの妻ナタリーと彼らの5歳の娘キラがいます。彼らはオデッサからアリヤーするところでした。ユリは、脳性麻痺を患っていました。オレグがたえず兄弟のユリを励まし続けている姿はとても感動的でした。ユリは正確に話すことができませんが、ユリを愛する家族は、彼の出す音によって彼の伝えたいことを理解することができました。

この家族は短い間にイスラエルビザを取得することができました。それで、私たちはテルアビブへの飛行機に乗るために、彼らを空港へ送りました。

私たちは、モルドバ出身の人々のアリヤーの支援を続けています。最近、イナの家族がアリヤーしました。イナの家族は、イナの他に、義理の娘のナタリーと三人の孫、ニチータ、ニコル、アンナです。私たちはイナと彼女の亡くなった夫のベンジャミンに20年ほど前に出会ってから、ずっと彼らにイスラエル帰還を励ましてきました。彼らの親戚のほとんどはイスラエルにすでにかなり前に帰還し、今イスラエルに住んでいます。

イナは約40年もの間、食堂を経営し、困窮したユダヤ人のために無料食堂も行ってきました。ですから、彼女にとって自分の愛する仕事を離れることは想像もできなかったのです。しかし昨年息子のイゴルをコロナで失い、その何か月か後に、夫のベンジャミンが癌で亡くなりました。それですべての状況が変わりました。イナと義理の娘は、「子供たちの将来のために」イスラエルへ行くことを決めたのです。また、隣の国のウクライナの戦争の状況もあ

り、彼らはアリヤーすることを決心しました。

それで、イナはイスラエルへ行くための支援を私たちに求めてきたのです。二人の未亡人と三人の幼い子供たちは、遅れることなくイスラエルビザを取得することができました。エベネゼルは彼らのパスポート手続きなどの支援をすることができました。また、彼らがアリヤーする日に、私たちは彼らを空港まで送って行きました。しかし、この大きな出来事も、子供たちの父親と祖父を失った悲しみによって暗いものとなりました。私たちは何とかしてイナとナタリーを励まし、神様が未亡人と孤児を特別に世話してくださると伝えました。また、神様は約束の地において彼らのために希望と将来を用意しておられると伝えました。



写真

上: イナ、ナタリー、ニチータ、ニコル、アンナ

右: スベトラナ、オレグ、ナタリーと娘キラ、イゴル（地域教会のメンバー）
ユリ（車椅子）

危険を乗り越える

私が初めてメリトボル出身のセルゲイと彼の妻バレリアと7歳の双子、デニースとヤナに会ったのは、ウクライナの戦争が始まる直前の1月のことでした。彼らのアリヤーのための書類の手続きの助けをするためでした。しかし、ロシアの侵略により、彼らはドネプロペトロフスクでイスラエル領事と面接することができなくなりました。それで、私は彼らに、かわりにポーランドに行つて領事面接を受けるようにすすめたのです。

バレリアの夫はメリトボルに残らなければなりません。それで、バレリアと双子の子供たちはザポロージェへの長く疲れる旅に出なければならなくなりました。メリトボルからは133キロほどしかないのですが、彼らがそこに着くのに26時間かかりました。なぜなら、検問所に500台もの車が並んでいて、ひどい渋滞だったからです。女性たちの中には、ロシア兵士に、子供や障害者が乗っている車はできるだけ早く通らせてほしいと訴えている人もいました。それで、6台だけ検問所を通過させてもらえましたが、その後またすぐに検問所は閉鎖されてしまいました。バレリアと子供たちは車の中で一夜を過ごし、激しい砲撃の爆発に耐えました。彼らは朝には何とか無事に目的地に着くことができました。

ザポロージェでは、バレリアと子供たちは難民センターに滞在しました。それからリビブに行

くために列車に乗り、バスでポーランドのブシェミシルに向かいました。そこで、エベネゼルのボランティアたちが彼らを迎え、ホテルへ送って行きました。そこで彼らは5日間滞在しました。「本当にありがとうございました。」とバレリアは言っていました。「ここで子供たちは少し休むことができました。散歩に行ったり、遊んだり、寝たりしてゆっくり過ごせました。...またよい食事も提供していただきました。」

バレリアはイスラエル領事との面接についてとても心配していました。なぜなら、彼女はユダヤ人の夫と結婚したのは、二人とも16歳だったからです。ですから正式に入籍したのはその2年後だったのです。「私がイスラエル領事館のホットラインに電話した時に、私の子供たちは、DNA検査をするまでイスラエルのビザは発行されないと言われました。でも、エベネゼルチームは、領事だけが最終決断を下す権威があるのだから心配しないで、と励ましてくれました。」幸いなことに、彼女も子供たちもDNA検査なしで、ビザを取得することができました。

「エベネゼルの皆さんの親切と励ましと実際の支援を本当にありがとうございました。私たちは本当に感謝しています!」とバレリアは、イスラエルに出発する前に語っていました。

ウクライナ



タチアナ
ウクライナチーム



写真
左: バレリアと双子のデニースとヤナ、ワルシャワ空港にて出発を待つ



戦争から逃れる

(Dmitri and his wife and their six children have returned to Israel and are happy)

ウクライナ



ヤンヤ
ウクライナチーム

ディミトリと妻と6人の子供たちはイスラエルへ帰還し、今は幸せに暮らしています。彼らは、戦争の恐怖の中で脱出の支援をもらったことを、エベネゼルに非常に感謝しています。私たちは喜び主に感謝しています。主は、燃える火の炉から彼らを救い出し、大きな困難にもかかわらず神の民を守ってくださったのです。

今ディミトリが唯一後悔していることは、彼がもっと早くイスラエルへ帰還しなかったことです。私たちが何年も前に初めてこの大家族をベルジャンスクに訪れて、ユダヤ人に対する神のみこころについて分かち合った時、ディミトリの親戚の何人かは私たちを信じてアリヤーを望みました。そして、ディミトリの祖母といとこ達がまず初めにイスラエルへの帰還を果たしました。

しかし、ディミトリは警告に耳を傾けず、ウクライナに残ることを選びました。年月とともに彼の家族も増えていき、生活費もかさんでいきました。そこでイスラエルに住む彼らの親戚が養蜂場を購入し、その結果、養蜂業が彼らの主な収入源となりました。

私たちが彼らの元に行ってイスラエルへの帰還を励ます度にディミトリはこう答えました。「何を言っているんですか？私達にはたくさん子供がいるんです。どうやってイスラエルへ行けると言うんですか？ここでは少なくとも養蜂場

があるし、何とか生活ができるんですよ・・・」

彼らの思いの中で、こんなに破壊的な戦争がウクライナで始まるとは、彼らは夢にも思わなかったことでしょう。その後、支援を求める多くの人々から支援の要請が来ました。その中にディミトリがいました。彼が電話をかけてきて、自分の苦しみについて語り、泣きながら家族の困難について話してくれました。「私たちのことを覚えていますか？私たちにはエベネゼルの支援が必要です!」

私たちはまだベルジャンスクにいます。私はそちらに電話するために、命がけで地下壕から出て来なければなりませんでした。私たちは今も絶えず爆撃を受けています。私たちの家の周りにはすでにもう建物が残っていません。あるのはただ破壊されたがれきだけです。私たちの家の屋根もなくなりました。食べ物も水もないまま地下壕に隠れていましたが、私たちにはもう何もなく、またここから離れることもできないのです。どうか、助けてください。」

ディミトリは、自分の愚かさで頑固さについて恥じていることを認めていました。なぜなら、もし彼が当時私たちの言葉に耳を傾けていたら、彼の家族は今ごろ安全な場所にいたからです。彼は途方にくらっていました。そしてどうしたらよいかわからない状況でした。私たちは何とかして彼を落ち着かせよう





としました。(P. 7) そして、彼の家族の避難を支援することを約束しました。それから、私たちはこの家族が無事に解放されるよう祈り始め、また同時に彼らを無事に助け出す方法を探し始めました。

この町がひどい砲撃を受けていたため、ディミトリとその家族は、市民の避難のためにバスに乗るための待ち合わせの場所に行くのを二度も失敗しました。しかし彼らはもうそこに残り続けることはできなくなりました。そしてついに、ディミトリと家族は、その安全ではない避難場所を出て、ゆっくりと、這うか走るかして、避難場所へとたどり着きました。でも、本当にこれは難しい状況でした。なぜなら、子供たちはみな弱って脱水症状を起こしていたので、ほとんど動くこともできない状態だったからです。彼らの一番年下の子供は、まだ生後6か月の赤ちゃんでした。

バスは満員でした。乗客は床にも座っていました。彼らはいくつかの検問を通らなければなりません。目的地に着くまでに34時間かかりました。食料と水の供給不足の問題もあり、またトイレにも行かなければならないので、彼らは本当に限界の状況の中にいました。ディミトリの妻はもう母乳が出なくなっていたため、赤ちゃんには何もあげられない状態でした。子供

たちも大人たちもみな泣いていました。ディミトリは、今までにこれほどの涙や痛みを見たことがなかったのです。

ディミトリは可能な限り、私たちと連絡を取ろうとしました。私たちはこの家族のために祈りを続けていました。そしてついに、彼らは安全な場所に到着しました。ディミトリと家族は救援センターへ案内されました。彼らは消耗しきっており、汚くなっていました。子供の服には乾燥した便と嘔吐のしみがついていました。彼らの目にはまだ恐怖が残っていました。しかし、彼らはやっと最悪の状況は終わったことを理解して安心しました。

この家族は一週間の間ケアを受けました。医薬品や食料や必要な衣服も提供されました。そして自分たちの話を聞いてもらうことで慰めを受けました。その後、ディミトリと家族は、スーツケースを用意して、気持ちも新たに元気を取り戻して、6人の子供たちを連れてイスラエルへ飛び立って行きました。

ディミトリの経験を通して、さらに多くのユダヤ人たちが神の召しを聞いてそれにこたえて、良い時にイスラエルへ帰還することを選ぶことができるようになることを、私たちはさらに願います。神の完全なみこころが、神の民の人生においてなされますように！

用語解説

アリヤー(Aliyah):

ユダヤ人が約束の地、イスラエルに帰還することを意味します。

ユダヤ機関(Jewish Agency):

1929年 C.ワイズマンによって創設され、エルサレムに本部をもつユダヤ人の国際的機関。パレスチナにユダヤ人の本拠を設けるというシオニストの計画の対外機関。パレスチナへのユダヤ移民の監督、ユダヤ系経済組織の確立などに努める。

オリム(Olim):

イスラエルに帰還するユダヤ人



写真
左:乗客はバスの床に座らなければならなかった

新しいウクライナ オリズムを支援する

イスラエル



ヘイディ&ヤーコフ
アロニーイサクユース村

エベネゼルが長い間支援してきた、イスラエルにあるイサクユース村にいる十代の青年の半数以上は旧ソ連から来ていて、そのほとんどはウクライナ人です。彼らの多くは、ヘブライ語を学んだり、勉強したりイスラエルでの生活に適応しながら、電話などを通してウクライナにいる家族を精神的に支えています。そして今、彼らの中には、ウクライナ戦争の難民たちを支援したいと願っている者もいます。

エベネゼルがアロニーイサクにおいて支援しているプログラムの中に、「ティクン・オラム」（世界を建て直す）というものがあります。この支援によって村におけるボランティア活動を貴重なものとなり、学生たちは様々なプロジェクトに参加することができるようになりました。難民がイスラエルに到着し始めると、学生たちは進んで彼らを助けようとします。彼らはオンラインでマッチングシステムを作り、質問事項を載せます。それらにより難民たちの必要なものと、人々が何を提供できるかを適合させるのです。

アロニーイサクでは、間もなく25人のウクライナからの十代の青年たちを受け入れることになっています。彼らはウクライナ出身で、モルドバ経由でやってきます。彼らのために急いで新しい寮が建設されました。ロシア語とウクライナ語を話すソーシャルワーカーが彼らのトラウマからの回復の助けをします。また、新しい生活のための学びのプログラムが用意されています。エベネゼル

の支援者からの寛大な献金が彼らを歓迎するための助けとなっています。なぜなら、彼らは彼らがここに来る時には何も持たずに到着するからです。

現在アロニーイサクに住んでいる学生たちが、新しく到着した人たちがイスラエルでの生活に適応できるように支援しています。特に自分たちの経験を通して支援することができるのです。しかしここに到着することは驚くべき体験でもあります。ララというアロニーイサクに2年前から住んでいる女性は、こう言いました。「ここは素晴らしいです。サマーキャンプみたいです。でも私たちは学ぶこともします！食べ物も気候も言語も違って、習慣も人とかかわり方も違うのです。」

1948年に、ホロコーストの孤児たちに仕えるために創設されたアロニーイサクは、これまで毎年約300人の十代の移住者とイスラエル生まれのユダヤ人たちを受け入れてきました。彼らは年齢別に寮で共同生活をします。また、350人ほどの学生が学ぶ、評価の高い学校が敷地内にあり、地域に住む学生たちとともに授業を受けています。

イスラエル政府が学生たちの学費を免除にしていますが、その支援は最も基本的なものだけに限っており、費用のすべてをカバーしていません。ですから、エベネゼルからの支援は大きな助けとなっています。

写真

上：ヘイディとヤーコフ、イスラエル支部のジェレミー、シュロミット、二人のウクライナの女性

右：ウクライナから最近何人かが到着ユース村の新しい家で働く



神のうちに とどまる

祈り

「あなたがたがわたしにとどまり、わたしのことがあなたがたにとどまっているなら、何でも欲しいものを求めなさい。そうすれば、それはかなえられます。」ヨハネ 15章7節

私たちの主のこの約束はなんと力強く遠大なものでしょう! 私たちとりなし手にとって、答えられる祈りが、何に基づいたものであるかを知ることは重要です。それは、神様と絶えず親しいつながりを持ち、神さまとみことばと一致していることです。つまり、継続的に心から御霊にとどまることなのです!

このようにして私たちが神様のうちにとどまる時に、神の霊が、私たちの思いからではなく神のみこころ、みことば、愛から来る祈りを私たちの心に与えてくださるのです。神様の心からの目的が私たちの心からの祈りとなり、それを神様が、約束の通りに成し遂げてくださるのです!

ですから、私たちは確信と喜びをもって、神様のうちに絶えずとどまり、心のきよさと平安を保つようにしましょう! なぜなら、神様からはなれては私たちは何もすることができないからです。そうです、祈ることさえもできないのです。

すべてのとりなし手にとって大いなる模範となる人はモーセです。彼は主への忠実さと献身と従順により、神の導きの元で、最初の偉大な出エジプトを導きました。彼は神様との深い親密な関係の中を歩み、主がともにおられるのであれば、一歩も進むことはありませんでした。(出エジプト33章15節) モーセはイスラエルの

ためにとりなし救われるように祈り、主はその祈りを聞かれました。なぜならモーセは神のここにかなうものだったからです。(出エジプト33章17節)

ヨハネの福音書15章では、イエス様は私たちの祈りにおいて神のここにかなうための鍵を与えてくださいました。それは、「わたしのうちにとどまりなさい。」ということです。

神様にあって、私たちはやがて起こるさらに偉大な出エジプトのために、この願いが聞かれることを強く信頼することができます。

主は、どうか私たちにあなたの栄光を見せてください。(出エジプト33章18節) すべての国々からあなたの民を集める時に、国々の民の前であなたの御名を聖なるものとしてください。(エゼキエル36章23-24節)

祈りましょう:

- ・主よ、私たちにあなたのうちにとどまることを教えてください(ヨハネ15章4節)
- ・主よ、あなたの偉大な御名の栄光をあらわし、あなたの民を私の国から集めてください(エゼキエル36章23-24節)
- ・主よ、あなたの民にあわれみをかけてください。そして、彼らをあなたの元に帰らせ、彼らが帰ることができますように。(哀歌5章21節)



エバ・アックスニッチ
ドイツ祈りのコーディネーター

ALIYAH NEWS

Keep updated with worldwide aliyah!



Subscribe to our YouTube channel:
Ebenezer Operation Exodus



MANY NATIONS ONE GOAL

[ebenezer-oe.org](https://www.instagram.com/ebenezer-oe.org)

Ebenezer OE International

Book
Now!

HOSEA 10:12
Ebenezer European
Conference 2022

Budapest Hungary

20-23 October

Visit: events.ebenezer-oe.org

Enquiries: budapest@ebenezer-oe.org



故郷に引き寄せられて

イスラエル



ジェレミー・スミス
イスラエルコーディネーター

「【神】である主はこう言われる。「見よ。わたしは国々に向かって手を上げ、わたしの旗を諸国の民に向かって掲げる。彼らは、あなたの息子たちを懐に抱いて来る。あなたの娘たちは肩に担がれて来る。」(イザヤ書 49章 22節)

今回は、エベネゼルがアリヤーの支援をする機会が与えられた女性の、非常に励まされる証をお伝えしたいと思います。ティナはこう書いています。

「私は、国々からの人々の愛ある肩に担がれて故郷イスラエルへ帰るという機会が二度も与えられました。ありがとうございます！」

私は最近エルサレムへ帰還しました。1999年にアリヤーをして当時はアシュケロンに10年住んでいました。でもその後そこを去り、スイスの快適な生活に戻ったのです。しかしながら、2017年に私の愛する母が亡くなってアシュケロンに埋葬した後、私はイスラエルへもう一度戻りたいと思うようになりました。スイスを一度でも訪れたことのある人なら、スイスがどんなに美しい国か、またその国を出ることがどんなに難しいか想像がつくと思います。しかし、エベネゼルを含めて幾つもの団体の働きを通して、この帰還を果たすことができました。

本当に驚く方法で、私はイスラエルの様々な団体で働く信者の方たち、またスイスのエベネゼルの方たちとつながることができました。彼らが私を励ましてくださり、また実際の面でも支援してくださいました。エベネゼルチー

ムは私の家に来られて、荷造りや清掃なども手伝ってくださいました。それだけではなく、私の持ち物を送るための費用を支援してくださいました。エルサレムでは、フィンランドのミニストリーホームの部屋が、エベネゼルによって私を受け入れるために用意されていました。私はこの広い3LDKのアパートに家賃免除で住まわせていただき、その間にいろいろな事務所を回ったり、またイスラエルでの生活についての学びや準備をすることができました。

今は私は自分の家に住んでいます。前に住まわせていただいたアパートは今ウクライナからの難民でいっぱいです。



写真 右:ティナは故郷
イスラエルへの帰還を喜
んでいる



Operation Exodus
Ebenezer Operation Exodus
International & UK Office
PO Box 9103, Bournemouth
BH1 9DA, UK
+44 (0) 1202 294455
enquiries@ebenezer-ef.org
www.operation-exodus.org



Operation Exodus USA
PO Box 568 Lancaster NY 14086

Phone: 716 681 6300
info@ebenezerusa.org
www.ebenezerusa.org

Operation Exodus



EBENEZER
OPERATION EXODUS

エベネゼル緊急基金日本支部

〒062-8691 豊平郵便局私書箱 37 号
Tel&Fax: 011-813-3558 (岡田)
office@ebenezerjapan.org
http://ebenezerjapan.org/
郵便振替 (名称) エベネゼル緊急基金
(番号) 02710-0-55842

Operation Exodus (出エジプト作戦) はエベネゼル緊急基金の実際的な働きの名称です。すべての国々からユダヤ人がイスラエルの地に帰還するように支援しています。彼らが約束の地に帰還するという神の計画と目的を宣言するべく 1991 年に 3 人の人から始まりました。

イギリス本部、アメリカ、スイス、ドイツを中心に国際的活動を展開し、さらにイスラエルを含めた 25 カ国に各国代表者と各国支部を配置しています。そして、旧ソ連諸国には実際的な働きのために、数多くの活動の拠点を設置しています。日本支部もその働きの一部です。